

(英語版)

(アラビア語版)

令和五年三月

SF小説…「ナクバの東」(七十六)

第三部…「カメラ」

七十六 ネオ・ギャラクシーの地球上陸(2)

数週間後、宇宙飛行士モシエは所定の任務を終え、数人の飛行士仲間と共に地球に帰還した。そしてネオ・ギャラクシーも地球に上陸したのであった。

祖国イスラエルでは帰国したモシエのために盛大な歓迎パーティーが催された。空軍では最高位の勲章授与式が行われ、授与式には大御所の退役將軍シャイ・ロックも出席していた。モシエが勲章を胸にシャイ・ロックに挨拶をした時、將軍は隣に立っている一人の男を紹介した。

「知っていることとは思いが、君と同じ空軍に所属する義理の息子だ。」

「將軍、もちろん知っていますとも。私の先輩ですから。」

『エリート』はモシエと握手を交わした。

「おめでとう、モシエ。俺は大気中でしか飛んだことはないが、宇宙はどうだった。君は今やイスラエル空軍、いやイスラエル、そしてユダヤ人の英雄だ。」

「そう言うあなたこそ宿敵イランの原子炉を爆撃した祖国の救世主じゃないですか。」

そのあとにモシエは一言付け加えることを忘れなかった。



「もちろんこのことは空軍以外ではオフレコの話ですが……」

エリートは苦い笑みを浮かべて軽くうなずくだけであった。

モシエはその時、エリートに生気が無く、言葉遣いに覇気がないことに気が付いた。そう言えば宇宙ステーションから元の職場に戻った時、仲間のパイロットから聞かされた噂話を思い出した。

「シャイロックの義理の息子がノイローゼだったさ。最近では戦闘機にも乗せてもらえないそうさ。」

(続く)

荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)

前節まで：<http://ocininitiative.maeda1.jp/EastOfNakbaJapanese.html>